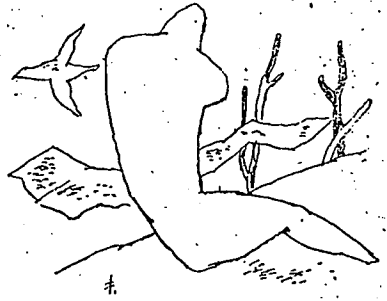


# の父

河川を見守る人

竹森 一男



日本人のうち幾人がこの青山士（アキウ）氏について、彼の功績について知っているだろう。彼が間接的に救助した人の数は恐らく太平洋戦争で死んだ人の何千倍にもはるであろう。今この人の歩んできた道を振りかえり吾々の建設の資とも糧ともしなければならぬ。

☆

## 彼の生涯は川との闘いであった

日本の治水の父といわれる青山士氏は、茶室風の書齋にすわつて、竹垣にかこまれた十坪の菜園をじつとみつめていた。生涯、川を愛し、川とたゞかつてきた歴史が、七十一歳の老翁のひとみに一瞬火花のように映るのである。五十年というもの、此處、静岡縣磐田市中泉御殿の家をはなれて、さすらいにも似た全国の河川を戦場とした生涯は終りをつけた。いまは、やすらかな命の灯を、魂のふるさとにとりもして、日々つるいゆく世界の荒波をみつめながら、父の残した古蒼な小庵にみちたりた余生を送っているのである。たずねてくる人もない。すでに白髪をいたゞくまで、ながい生涯を相共に歩んできた妻と、まだ幼い、中學生の長男との、つまましい身にしむ孤寂の生活である。三人の娘は、それぞれ音楽を修めて、嫁いでいつた。道路ひとつへだてた寺院には、青山氏自身の墓碑銘がしずかに待つている。しかし彼は生きていた。また、たとえ神が彼の魂を召すことがあつても、永遠をつらぬきよい一すじの川のながれは、日本の治水の道をまもるにちがいない。

それまで青山氏は生きねばならない。インフレの波瀾は彼の余生をおびやかしている。わずかな恩給をのり越えてひしめく生活苦は一步も退こうとしない。治水の父は、たれも知らないとこで、生活の波に吞まれようとしている。しかし、これをどうすることもできない。

彼はたゞかう。生あるかぎり、生きのび、じつと日本のゆくえを追い、治水対策にやさしい眼をそそぐのである。

ふりつづく初秋の雨にぬれそよぐ竹藪と菜園から、遠くはるかに想いを全国大小三〇〇〇の河川に走らせ、獨流にひしめく脆弱な堤防に愁いの肩がひそめられる。若ければとんでゆきたい。日本の河川は、山林の濫伐と治水の荒類によつて危険にさらされている。とくに、木曾川、利根川をはじめ、淀川、筑後川という國家管理の重要な河川は、二〇〇ミリの降雨にもたえられない。流域住民は、「五

# 水 治

の〇〇〇三

月雨に床を移してねたりけり」といつた嗣子で全然水防に關心をもたぬ。政府は豫算を出し惜しむ。これでは水びたしになつてしまふ。自然とのたゝかいは、はじめから人間の負けである。

彼の生涯は川とのたゝかいであつた。川に憑かれていた。川を愛していた。さかまく濁

流にずぶぬれになつてわめきたる若い自分のすがたが榮爾として芝の緑も美しい築堤に立つて清流をみつめてゐる。ジャングル地帯の測量。そして廣大なパナマ運河の開鑿に従事してゐる青年の弾力にとんだ日焼けた顔が浮んだ。つば廣の中折に白いワイシャツ、乗馬ズボンをきりりとはいて肩から圓い水筒を吊りながら、ガトウン開門の測量にあたつてゐる。

## 壯 大人人生への出發

一九〇三年（明治三十六年）のことである。青山氏は高等學校時代に内村鑑三氏の門下に入つた。日本的キリスト教徒として、一人一黨、自己の才能と職責に應じて、人類文化のために生涯をさゝげんとする信念を、若い柔軟な魂に強く植えつけられた。まず、人生の眞理をみつめる

ことであつた。それからリアリストとして現實の社會を批判することであつた。さらに飛躍して、人類にプラスする仕事を自己のなかに定め、壯大な氣宇をもつて人生を出發することであつた。

「自分が生れたときより、死ぬときの方がいい世の中であつてほしい」と彼はハーシエルのように思つた。自分が生きたことのために、少しでも文化の進展にあずかりたいと思つた。内村氏の「後世の最大偉物」を通して、世界の偉大な先覺者の言葉が若い胸のほのおをかきたてるのであつた。「人間はどこへゆくべきか」を考へた。「人はいかに生きるべきか」を考へた。それは日常の欲を追いかけてゐる人々の、現實の生活を見ては混迷するばかりだつた。過去に、どのような人が、どのように生きてどのような仕事をのこしていつたかを見ればつきりわかつた。すると人間にたいする信頼がわきおこつてくるのだつた。何よりも、すぐれた過去の偉物をまなぶことであつたが、自分には何の才能もあるとは思われない。もしあるとすれば、からだを張つて、何もかかを實踐しようとする意氣にもえてゐるだけである。黙々として一すじの道を研鑽するならば、牛のあゆみに等しいけれども、未來世界のために、一本の杭になることは出来るであらう。青山氏は、神の前に、一個の人間らしい人間になることを誓いながら、技術者として起つことを決意した。

東大の土木を卒業したとき、彼は安易な道を選ぶことを避けた。將來の仕事のために、冒險と訓練が必要だつたのである。その漲る熱い血潮のかなたに彼の夢をかきたてたのは、「パナマ運河の工事に従事してみたい」というとてつもない念願だつた。スエズ運河を開鑿したフランスの技師レセップ伯は、パナマ運河を計畫したが失敗に終つた。アメリカ政府新フランス運河會社よりその特權を買収して、いよいよ運河開鑿を本格的にはじめようとしていた。青山氏は、石黒五十二氏のスエズ運河視察記録を読み、峰岸氏のパナマ地峡横斷旅行記に感動して、在學中よ

り運河開きくに大きな夢を抱くようになっていたのである。土木教授廣井勇氏は、青年の頃、ミシシッピ川の治水工事に従事した唯一の日本人であつた。その頃を回想する廣井教授の、熱情に光る瞳に打たれながら、青山氏の拳は汗ばむほど机の下でにぎりしめられた。フランスのアッタンシェンは日本の河川を視察して、「ピリ湖を通して日本海を大阪へ運河をもつて繋げる」と新聞に發表した。日本の堤防の技術はオランダからまんで、すでに先覺者によつて發展の緒は與えられていたが、未だ治水は原始時代を出ていない。日本文化の發達とともに、産業に重要な關係をもつ治水対策は、壯大な抱負のもとに若い技術者の手によつて進ま行われなければならぬ。青山氏は、まず單身アメリカにわたつて優秀な技術を身につけるとともに、世界の治水を眺め、それを日本に適応して革新的な發達を促す必要を痛感した。氣ははやつた。一刻も猶豫はならぬ。

廣井教授は、若き日の熱情をふたゝび青山氏に見出すと、微笑をりかべながらいつた。

「よろしい。行きなさい。イスミアン・カナル・コムミッシュユナアのウイリアム・H・ピア教授は、私の友人だから、紹介状をかいてあげよう。

しかし、死んではなんにもならないよ。パナマ地峽は人の住めるところではないのだ。」

一八五五年にパナマ地峽横斷鐵道が竣功したとき、ジャングルと沼澤におおわれた工事場で、マリリアと黄熱病でたおれた人々の數は「其の使用せる枕木の數だけの人命を失はなえり」と傳えられているほどであつた。まだマリリア、「黄熱病の蚊傳播論が發見されておらず、人々は「喰えや飲めや、われらも明日は死するやもしらざる身なり」と、やけくそになつてはたらき、そこには「死が住んでいた」のであつた。

八月十一日、青山氏は旅順丸四〇〇〇屯の三等船客となつて、横濱よ

り出帆した。懷中には五〇ドルの借金と、友人たちから送られたはなむけの言葉「我汝に命ぜしに非ずや心を強くし且勇め汝の凡て往くところにて汝の神エホバ偕にいませば懼るゝこと勿れ戰慄なかれ」(ヨシユア記第一章第九節)をじつと抱きしめていた。熱涙のなかに、千萬人とい

えどもわれ往がんの烈々たる氣概を秘めていたのである。ワシントン州のシャトル市で、まずしい下宿におちついた彼は、ときを待たず不安のうちひるまず勉學をつづけた。レストランの料理場で、白いエプロンをつけて、コックや皿洗いをした。新聞社で譯の下請けをした。鐵道會社で線路工事に使われた孤獨な若い日本人の生活は容易ではなかつた。念願がかなうまでには失意の底に陥ちこみそよな不安とたゞかいたながら、あらゆる快樂を斷つて、來たるべき日のために力を充實させておかねばならなかつた。男子一生の仕事を神にちかづた上は、たとえ一人夫としてツルハシを握ろうとも運河の水に此の腰をひたすべきだ。

### 自然とのあらゆるたたかい

パナマ共和国とアメリカ政府は運河條約の批准を交換した。ウイリアム・ピア教授は青山氏を招いた。おどる胸をおさえて、一九〇四年六月一日、ニューヨーク港ユカタン丸の艦内でイスミアン・カナル・コムミッシュン工事従業員の一人として契約書に署名した。七日の午後、熱帯の夕陽が岸邊の椰子にゆれて光るありさまを感動的にながめながら、待望のコロン港に到着した。この大西洋カリビアン海より、えんえんとして東西大陸をつらぬく運河は、太平洋パナマ灣にむかつて走るのである。彼はかぎりなく勇ましい幻想にふけりながら、蚊張と毛布一枚の荷物をついで、シヤグレス河岸のボネオ村にいつた。そこは、もとブラ

彼を待つていた。屋根裏には何千匹もしれぬ蝙蝠が巢食ひ、はげおちた壁のあいだから油虫がぞろぞろ通つていた。ぐすぐらいジャングルと不潔な沼澤があたりをとりまいていた。彼はなにもも意に介しなかつた。光榮をつつんだ歡喜の思ひは、一切の悪條件を吹きとばす力をもつていた。

二、三日すると、測量、ボーリング等の機械が到着した。まず、ボヒオの堰堤豫定位置の測量と地質調査の準備がはじまつたのである。やがて、ガトウン人工湖の渚水面積測量に従事することになつた青山氏は、バスオビスボからシヤグレス河上流へ溯り、ガトウンシユ河から分水嶺をこえて、アグア・スシアからガトウン河を下り、さらにガトウン村に出でシヤグレス河の支流トリニグッド河へ溯つて、ながい天幕生活をつづけた。この野外測量隊は、組長一人、アメリカ人技師五人一人について四、五人の土人労働者、荷物や糧食運搬をかねた料理人五、六人で編成されていた。測量といつても、つたかずらの繁茂する棘のジャングルをふみわけて、一步一步きりひらいてゆくのであつた。精悍なインディア人とスペイン人の混血兒である土人は、青龍刀のようなマチエツテをふりかざして、眼前を遮断するほのぐらい密林を伐採して先頭をすすむのであつた。ときどき猿の一種で尻のような獠猛な動物や、豚を食う虎のような山猫に出遇うことがあつた。毒蛇や蝸、かめれおん、毒蟻がうじやうじやいた。人を食うといわれるコメヘン蜂の襲撃に遇つた河には四メートルもある鱒群が懐んでいた。こいうい難題のなかでマラリアと黄熱病が跳梁しているのであつた。

干燥季には牛蠅になやまされ、はじめした雨季には一日中水につかつて作業するので疲労がはげしく下痢症が蔓延した。仕事場の都合で往復距離が何キロにもびると、青山氏は現場にバーム莖の掘立小舎を

建て、折た、木式の帆布を敷いて、土人どもに起居をともにした。一晝夜十四五回の下痢にかゝつたとき、二本の太木を伐つてなべた眞暗な便所まで、ランターンを片手によるめき通ひながら、「死んではならぬ。バナマ運河に従事している唯一人の日本人だぞ。しつかりせい」と自らをばげました。それでも仕事に氣にかゝつてならなかつた。測量の途中はげしい眩暈をおぼえて倒れた。

巾一〇メートルの谷川を涉つて、對岸で仕事をしているときであつた。大つぶの雨がおしよせて、あたりは灰色の雨しぶきにとざされてしまつた。青山氏は、シャツの肩を打つ雨のなかで、腰まで水にひたたりながら熱心に仕事をつづけていた。もうわずかである。雨のために仕事をうちきるわけにゆかぬ。濁流はあふれはじめた。彼は測量野帳の皮カバンを頭上にくゝりつけたまゝ、濡かれたように仕事の手を休めなかつた。ふとふり返つてみると谷川の幅は三倍となり水勢はふくれ上つて渦巻いていた。彼はあわてゝ泳ぎだした。岸に着こうとしたとき、頭に戴せたカバンが濁流にとらえられ、あつという間もなく下流の方へながされていつた。彼は必死に追いかけた。ぬき手をきつてすゝんだ。カバンをつかんで口にくわえたとき、恐しい流れの力が加わり、數メートルかなたに怒りくるつて逆巻く龍壺をみとめた。彼は逆流とたゝかかつて岸にたどりついたが、全身の骨がくだけ散るような痛みをかんじながら昏倒した。

### 認められた若き日の感激

こいうい自然とのたゝかひのうちに、尊い體驗が身をもつて仕事への情熱をかきたて、きたえられた不逞の魂が肉身のよりに水を土を愛しはじめたのだつた。彼は日本のエンジニヤの代表として、おなじ大學を出

たばかりのアメリカ人に負けてはならなかつた。彼は二年半の天幕生活を終えて、ガトウンにもどり堰堤や閘門、餘水吐の測量や設計の仕事に没頭しながらも、パナマ運河開さくの偉大な歴史のひとまに、赤い一點の花のように咲いている日本人のほげしい精神を地圖の上に描くことを忘れなかつた。アメリカ人は、よく笑い、よく歌い、よく遊んだ。仕事は實行力に富み、どのような苦難もおそれず好んで冒險をこゝろみだ。土木技師が、電氣も、機械も自らの手で操作することが出来たし、大工仕事や靴直しまで見事にやつてのけた。これが日本人のまなぶべき長所だつた。日本の大學教育が、學理や公式に重點を置いて技術上の實行力をおろそかにしている點などが、彼の經驗上あきらかとなつた。彼は治水の技術史をひもどき、この眼で、最高の機械力と資材をもつて日毎建造されてゆくアメリカ土木技術の優秀さをながめながら、日本の原始的な治水状況を思ひしのであつた。日本人の技術の缺陷をうすめて對等にアメリカ人と仕事をするためには、作業の餘暇に遊んでいるひまはなかつた。チエスにも、玉突きにも、トランプにも加わらなかつた。酒も煙草ものまなかつた。

ついに青山氏は日本人技師の實力をみとめられた。ガトウン閘門の竈壁、下流の中央鑿船壁、ガトウン村給水工事の設計を擔當することになつた。その他、沈澱池、淨水池、ポンプ小屋、試験所と相ついで設計を行つた。これらはすべて設計通り工事がすゝめられやがて完成した。かつて、アメリカが、パナマ共和国より地峽三十六方マイルを一千萬ドルで購入してより、總工費三億七千五百萬ドルをかけて着手した全長五〇マイルのパナマ運河は一九一五年ついに完成、開通式が盛大に行われ、たとえ、小さい一本の杭であつても、この腕の血潮充ちて、ちからいつぱい打ちこんだのである。その技術と精神は、パナマ運河あるかぎ

となつた青山氏の青春は、さらに祖國にむかつてはげしく燃えたつた。彼は友人から送られた藤村の詩をよんで泣いた。

海の日沈むを見れば  
激り落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐々  
いづれの日にか國へ歸らん

「椰子の實」の歌は、はりつめていた彼の心を擲つた。七年間の孤獨な獄身のうちに閉ざされた情愛は、意外に強くゆすぶられた。仕事は終つたのである。そして、新しい仕事待つているのである。

### ○ 川放水路の工事に注がれた情熱

歸朝すると、青山氏は旅裝をとくいとまなく、むかえられた内務省土木局に奉職した。現在の建設院である。

八十の重要河川は國家管理になつていて、全體的な治水治山の構想は土木局が握つていた。こゝは大工事の源流である。青山氏はいまその源流にたゝずんだ。堅牢な堤防にまもられた全國の河川が、白いきらきら光るうつくしい律動のうちに、のびのびと山嶺と平野のみどりを縫ひて、大海にそゞぎゆくありさまが眼に見えるようだつた。そこに平和國家の源もあるやうに思われるのだつた。「われ川と共に生き、川と共に死す。無能無器にして、この一發につながら」と、青山氏は感慨ぶかく呟いた。彼は結婚した。新しい、清い、平和と愛の生活がはじまつていたのである。

青山氏は、政府が一九〇七年以来の懸案であつた荒川下流改修工事、すなわち新荒川放水路に着手した。まず測量、設計であるが、河道の形成から發想するので大なる苦心を要する仕事であつた。責任は大きかつた。まず、附近の地勢を觀察し、天災地殃を考え、流域人民の生活と意向をうかがつて、しかも、工期、工費に制肘せられる事業を完璧に遂行しなければならぬ。狐狸、浚渫に使う九百萬立方メートル突の老大な土叢を、どこから、どのようにして運ぶか、人力、機械力の驅使配置はどうすべきか。その他一切の技術上の問題以外に大切に思われることは、荒川地域一帯の村民を打つて一九とする強固な水防組織の結成と、政治的な人心掌握の必要である。彼は睡もやらず、毎夜、轉輾として考えた。すべて人力をつくして天意にまつよりない。アメリカ出發の勇猛心をふたゝび呼びもとすべきである。そして、まず一畝、そして刹那刹那を、けんめいに生きるよりない。そこからすべては築かれてゆくに違いない。

工事ははじめられた。青山氏は政府との連絡、設計、測量、それに現場監督を、驚嘆にあたいする情熱と力によつて日毎くりかえした。人々は動かされぬわけはなかつた。

建設は限に見えてすゝんでいつた。従事員はもとより、地元住民は青山氏の人徳と獻身に服した。彼らは治水のなにもなるかを、自分の利害關係以外に心の底から知らされた。水防組合は強化された。いざ洪水の危険にさらされると、構築中の堰堤をまもりぬく、一日もはやく完成をねがう心が火の塊となつて、住民は半鐘をたゝいて水源地や堤防、浚渫中の河岸や建設中の閘門にあつまつてくるのだつた。芝をうえた堤防の上から水があふれて、田畑をなめると、住民は土壘や壘や空俵をはこんで防いだ。土工は全身まつばだかになつて土壘を築き、竹を折つて堤防を縫つた。人垣となつて獨流にのまれ、對岩連絡の土運船がてんぶく

じつと土壘に胸をはさまれる人々の叫喚のなかに、住民は米俵をかづいできて溢水を遮るのであつた。自己の安全のために避難し、食糧をはこび出して逃げまどうという混乱はふしぎにとこの村にも見られなかつた。堤防をのりこえた水が、荒川の全流域にながれだせば、何千町歩の田畑は一しゆんのうちに呑まれてしまふ。その大きな、共同の被害をもるためには、一身一家のおずかな犠牲は問題ではない。たくわえた貴い自家米まで、土壘がわりに運んでくる村民の氣概は、青山氏の胸を熱くした。日本の治水は大丈夫である。一刻もはやく立派な放水路をきずかねばならぬ。

かくして、仕拂總額二六七九萬圓を要した老大な荒川改修工事は、一九二七年に完成した。沿岸の洪水被害は永久にのぞかれ、岩淵、綾瀬、隅田水門を経て、東京灣にそゞく新放水路は、大東京水害のおそれを斷つた。あとは逐次、浚渫、護岸、官民一體の補修、水防協力があるのみである。青山氏は放水路分流通に、大石塊をおき、その中央にブロンズの碑をはめこみ、表面櫻草模様には、「此ノ工事ノ完成ニアタリ多大ナル犠牲ト勞役トヲ拂ヒタル我等ノ仲間ヲ記憶センガ爲ニ」と彫つた。

### ③ といて信濃川の治水にも

その年、信濃川がはらんした。補修を怠つていたので、内務省は面目をうしない、狼狽した。早速、優秀な技術者を派遣して、根本的な工事をやる必要にせまられた。そして、内務技監、新潟縣土木出張所長として、青山氏がえらばれたのである。青山氏は、すぐれた助手が必要だつた。いや、宮本武之輔氏を右腕として連れて行きたかつた。彼は、すぐれた技術者であり教養と深く広い識見をもつ、ふしぎな魅力ある人物だつた。もし宮本氏が行つてくれたらどれほど力づくよく、作業はいきい

きとすることだろ。寝食をともし、おなじ困窮とたたかう生活は、どんなに愉快で生きがいのあることだろ。

「宮本尉、ぼくと信濃川に行こう」と、青山氏はいつた。

「青山氏とならゆくと、行きましよう。すゝんで行きましよう」と、宮本氏は欣然として答えた。

十二月十六日吹雪のなかを、一行は新潟に着いた。そしてたゞちに仕事をはじめた。

青山氏と宮本氏の呼吸は、びつたり合っていた。また、技師から土工にいたるまで、百餘名の常備従事員は、一つのかたまりになつて大自然とたゞかい、作業をつづけた。荒川とちがつて、従事員は一つの家族となつて現場にねた。一つかまの飯を食つた。青山氏は、バナマ運河の天幕生活を思いださずにはいられなかつた。彼は明朗なきびきびした動作で、つねに唇に愉快そうなほほえみをうかべながら、「よくあそび、よくねわり、よく働こうぜ」といつて土工たちの間をあるいた。彼は相かわらず一てきの酒もたしなまなかつた。一本のたばこのまなかつた。あそぶことを奨励しながら彼自身は散歩とスポーツ、そして一巻の聖書が休養の一切だつた。

工事については、土砂のなかに一本の葦の根がはいつていても叱咤するきびしさだつた。しかし彼は従事員をこまかい心づかいで愛した。その、深い慈愛と、かぎらない抱擁力と人格は、吸いつけられるように彼にあつまつた。雨が假小屋のトタン屋根をばげしくたゞくと、命令もなく彼等は毛布をけつてはねおき、雨ガッパにゴム長靴をはいて、深夜の堤防めざして走つてゆくのだつた。くる日もくる日も雨がふつて、水源地からあふれ出す濁水の音が堤防をたゞくと、安閑とねむつてゐるものは誰ひとりとしてない。上流の堰堤が決壊したこともあつた。青山氏は

なり、激雨の橋なぐりを崩にうけて、高く懐中電燈を提げた青山氏の、そつ先指揮する姿はものすごいばかりだつた。だが、彼の唇には、ふしぎに、ほほえみがうかんでいて常に消えることがなかつた。

なまり色の空から霏々とふる雪のなか、または颯風荒れる二月の凍る夜々、雪もなくふる春の雨に川面に散りゆく花の行方を追いながら、そして、磯の水も沸く盛夏に、彼等はやすむことなくはたらいた。

川に漲る濁流に

堰の固めの安かれと

盡す誠の血の誓

虎は死しても皮止め

人は死しても名を残す

信濃治水のその爲に

水を分ちて大河津

増に漲る

仇浪落せば

行手は日本海

宮本氏の作つた補修工事の歌聲は、信濃川をながれてついに日本海にそゝいだ。

一九三三年、その完成の日に、青山氏はブロンズの記念碑にこう刻みつけた。「萬象ニ天意ヲ覺ユル者は幸ナリ人類ノ爲メ國ノ爲メ」

(治)

水にはまず人の心を治めること

闘争がはじまると、政府は治水をかえりみなくなつた。のまならす山  
林は濫伐され、土砂は山をながれて川底をたかめ、芝の堤防はけずりお  
とされて畑になつた。いまや、水害の直前、水防をわすれた流域住民は  
ヤミに流す米俵をかついで逃げるのであつた。

官を辭して十年、世はことごとくかわつた。

青山氏は、ながい暇想から醒めると、あたまをもたげて、しずかにひ

## 話し言葉

茨城 増子 ひろ

「フー」という言葉が容易に言わなければかりに、世界的な誤解を受けるほど、わたしは會話に不得意である。これは、他面わが國の話し言葉が不熟であると共に

わたしはが會話の内容を持たなかつたせいであると思う。後者が原因で話し言葉が熟さなかつたという方が適切であるかも知れない。

若い女性が明瞭に物を言おうものなら、それが眞理であればなおさら、「生意氣な女」、「可愛い氣ない奴」と侮辱されず

に済んだためしはない。服従だけが女性の美德と守られた因習の中で、眞實は常にまげられ通してあつたために、平明な話し言葉は生れず、かえつてコケットリイを以て本心、いな自己の空白を隠すようになつてしまつた。日本女性の無意味な笑顔なのはなかる

うか。

「女は愛嬌」といつても、それが心を樂しませるような會話ではなしに、單なる笑顔や空虚なお世辭に過ぎないのは、男性の玩弄物という女性の自覺した立場に於て、明瞭に自己の意志表示をすることがどんなに不利であるかを知つて、その上で行動する陥穽なのであることに氣付かねばいけない。

無意味な笑いやイヤ味たつぷりな作り顔をして、本心にもあらず自己の空白を暴露する不手際から逃れるために、平易、明瞭な話し言葉を使わなければならないと思う。近代は自己解放の時代である。眞實の自我の解放なしには日本の近代化はなく、また民主化の遂行もあり得ない。それには、お互いが討論を重ねて納得する民主主義に適應する、平易明瞭でしかも豊富な話し言葉で欲しい。

自己主張がはつきり出来て、相手の心も樂しませる會話であつたら、どんなに陰鬱なこの社會の光明になり、わたしたちの生活が愉快であるかと思う。それにしても、高い教養や該博な知識をもつて自己完成を期すること豊富な話し言葉を作る先に相違ない。

「治水にはいろいろの問題があるとしても、まず人の心を治めることじや。しかし、すぐれた先覺者の足跡がもうあとを絶つたとは思われぬ。いまも民族のおなじ血が、うけつき流れているはずだ。そしてながれるであらう。」



三聖小石先生指導  
婦人ペン習字會員募集

本日の習字講座は最も婦人向き書風として全國女性間に大好評です。本會で學べばどんな初歩の方でも、楷行草かな手紙文字が飛躍するように楽しくなります。  
▼ペン字科全四巻二〇〇四〜共▼毛筆科全五巻二五〇四〜共▼入塾指圖付▼見木切手一冊廿錢  
東京 都 豊島區 婦人みづぐき會  
東京 町 豊島區 婦人みづぐき會

工學博士 富岡惟中先生監製

## はとり染



大好評の高級家庭染料 (直接染料)  
色合、濃度、染上がりが美しい  
・家庭で強力にもスグ出来る  
・只今、黒と紺の二種を分賣中  
・試一ケ五〇圓送料二ケ迄十圓  
・染店化粧品百貨店にあります  
東京 都 豊島區 婦人みづぐき會  
東京 町 豊島區 婦人みづぐき會

代理部 講談社 振替 6629